

【4月12日受信】

原子力市民委員会(CCNE)のオープンレター(4月7日付)に対する国際放射線防護委員会(ICRP)の返信(1)の要点

- ・現段階で ICRP 2023 のプログラムを変更することは非常に困難。会場でのプログラム(ライブセッション)のトピックはすでに発表され、セッションの共同議長も確定し、講演者の招待も始まっている¹。
- ・まもなく募集開始のビデオプレゼンテーションとポスタープレゼンテーションの概要の提出を歓迎する²。
- ・ライブセッション「How experience of the Fukushima Daiichi accident is improving RP」でのプレゼンテーションについて、2週間以内に概要(400Word 以内)の提出があれば、プログラム委員会で検討する(保証はできないが、慎重に考慮する)³⁴

【5月24日受信】

CCNE の 2 通目のレター(5月4日付)に対する ICRP の返信(2)の要点

- ・ICRP2023 プログラム委員会コアグループの会合で議論した。
- ・国際会議のため言語は英語。他言語への通訳の手配は、財政的・経営的な限界から不可能。
- ・一方、放射線防護に関心の高い日本での開催を考慮し、今回初めて多言語のポスターや字幕付きのビデオプレゼンテーションに可能性を広げる(日本語で録画し、英訳をつけることも可能)⁵。これらの展示に関し、チャットでのやり取りや、提出者自身がオンラインでディスカッションセッションを企画することもできる。
- ・CCNE からは基本的にはビデオプレゼンテーションの提出を期待する。概要を 500 字以内で下記のサイト

¹ 2023 年 4 月 28 日に開催された「ICRP 次期主報告ウェビナー」の 2-1)で、ICRP2023 の現地実行委員長である神田玲子氏(量子科学技術研究開発機構)が ICRP2023 の準備状況について「プログラムの大枠がやっと決まったが、誰が話すかなど未定部分も多い」と報告している。 <https://www.jrrs.org/informpage/detail/1260>

² ICRP の過去のイベントに参加した経験では、pre-recorded video presentations and poster は、投稿すればほぼ誰でも受理されるもの。今回 CCNE は、対面で行われるメインセッションでの報告を求めた。

³ ライブセッションへのアブストラクト(要旨)の投稿は ICRP2023 のサイトにも記載がなく、どのように扱われるのか疑問もあったが、返答とあわせて投稿した。

<https://icrp2023.jp/abstracts/>

⁴ 運営上、要望していた福島での開催、通訳、参加料の引き下げについては言及がなく、返答メールで再確認した。

⁵ 国際イベントである ICRP Fukushima recovery 2020 では英語、日本語が使用された。メインスピーカーには通訳がつき、ライブで Q&A も行われた。他の投稿者も、英語もしくは英語+日本語の動画をアップロード・公開できた。

<https://www.icrp Recovery 2020>

ICRP2021+1(バンクーバー)はハイブリッドで行われ、リモート参加者はオンラインでポスター掲示、動画投稿ができたが、ライブセッションの streaming 視聴は不可だった。

<https://icrp2021.com>

Fukushima recovery 2020 でもオンラインでのポスター掲示、動画へのコメント、質問など書き込む機能はあったが、不活発であった。ICRP 委員が参加して聞か場としては、会場でのプレゼンテーションが重要と考えられるため、今回の要請となった。

から提出できる(締切は 8/4 だが、早い方がよい)。

<https://event.fourwaves.com/icrp2023/submission>

・遠隔地からの参加者・発表者の登録料の減額は検討中。途上国の学生を優先する可能性が高い。

【6月3日受信】

CCNE の3通目のレター(6月3日付)に対する ICRP の返信(3)の要点

・CCNE から提出された概要は却下されたわけではない。内容を検討した結果、ビデオプレゼンテーション(日本語での発表ややり取りが可能)の方が、ライブプレゼンテーション(英語、質疑応答も会場参加者のみ)よりも皆さんのニーズに合っていると考えた。

・ご指摘のようなさまざまに視点が歓迎されるため、より多様で批判的な講演者の概要の提出も促してほしい。放射線防護システムの改善に関するテーマであること、敬意を払ったプレゼンテーションであることが求められる。

・ICRP は「福島の本質的な問題を捉え」、この知識を人々の生活の向上に役立てたいと願っている。それが10年にわたる「福島対話」とその関連作業における中心的な考えであり、それにより、世界の放射線防護の改善に役立てることができる。